

編集後記

編集委員

委員長

藤田郁代

副委員長

立石雅子

宇野彰

勝木準

熊倉勇美

倉内紀子

小林範子

城間将江

関啓子

玉井ふみ

深浦順一

矢守麻奈

木枯らし第1号の声を聞き、町では急にコート姿が目立つようになりました。言語聴覚研究3巻3号をお届けします。

原著論文は2編です。1編は脳血管障害により球麻痺となり、継続する摂食・嚥下障害に対しバルーン法を訓練として導入し効果を測定した結果、自然治癒の可能性の低い慢性期の摂食・嚥下障害患者で効果が認められたことからバルーン法の有用性を検証した論文です。18例という対象についての実証的な論文です。各臨床領域においてこのような実証的な論文の増加が望まれます。もう1編は視床出血後の純粋失書に対し、ワープロを訓練に用い書字障害の改善が得られた症例の報告です。書字には拒否的であった症例の仮名の書字障害が改善し、キーボードの中から目標キーを選択することが有効であったと考察しています。臨床の間では身近にあるものを有効利用することも重要です。

本号では2006年5月に金沢で開催された第7回日本言語聴覚学会のセミナー「軽度の言語聴覚障害を見逃すな」の講師の先生方に寄稿していただきました。藤野先生は発達障害について、言語聴覚士が評価と指導計画の立案で特別支援教育に寄与できることを強調され、小林先生は軽度聴覚障害について、音声言語のみならず文字言語にも遅れが見られることが多く、言語環境改善のために家族への指導などの働きかけが重要であると述べられています。都筑先生は吃音について、吃音に関する知識の啓発と言語聴覚士に相談できるシステムの構築の必要性を強調されています。軽度障害を見落とさないためには、技量の研鑽と家族や他職種との連携が必要であると座長の能登谷先生は締めくくられています。重度の障害に比べて発見が遅れる傾向のある軽度障害についても評価・訓練のできる言語聴覚士が求められています。

『調査報告』は学術研究部小児言語小委員会が2005年11月に行った学齢～成人期の言語発達障害児者に関するアンケートのまとめです。特別支援教育が開始され、言語聴覚士がどのように関わるかという点は今後の課題です。

『現場最前線』では、訪問リハビリテーションと通所介護を行う介護保険の現場から介護保険における問題点と言語聴覚士の役割が報告されています。小児領域、介護保険領域と広がりのある職域において言語聴覚士がどのような役割を担うのか、考える契機となります。

(立石雅子)

言語聴覚研究(第3巻 第3号)2006年12月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 8-5-8 正和ビル 304

(☎03-5338-3855 FAX 03-5338-3856) <http://www.jaslht.gr.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Showa-Build. #304, 8-5-8 Nishishinjuku Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0023, Japan

©2006, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 5-24-3(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)医薬広告社 ☎03-3814-1971(FAX 03-3814-8915)